

## 3歳未満を観劇対象とした人形劇の現状と特徴

松崎行代

The Present Conditions and Feature of the Puppet Play  
for Under 3 Years Old Children

Yukiyo MATSUZAKI

**要旨:** 近年、子育て支援の拡充に伴い3歳未満の子どもとその親を対象とした人形劇公演が増加している。本研究においては、そうした3歳未満を観劇対象とした人形劇に取り組む職業人形劇団および作品についてその現状把握を行うとともに、それらの作品を分析し、3歳未満を観劇対象とした人形劇作品の特徴をまとめた。その結果、テーブル舞台を使用した出遣いの上演形態が多用され、舞台と観客席が一体化された空間の中で、観客は演者や人形と直接的にかかわり上演に参加する「観客参加型」が特徴としてあげられた。そしてこの特徴は、観客に対し「遊びと鑑賞との融合」をもたらすことが考察できた。

今後3歳未満児の人形劇観劇およびその作品について研究を進めていく際、本研究により導き出された「遊びと鑑賞の融合」は重要な観点となると考えられる。

**Key words:** puppet play (人形劇), theatergoing (観劇), appreciation (鑑賞), under 3 years old children (3歳未満児), child-nurturing support (子育て支援)

### I. はじめに

近年、子育て支援の拡充に伴い、行政や民間によるさまざまな子育て支援事業において、3歳未満を観劇対象とした人形劇公演が増加している。筆者が在住する飯田市においては、「はじめて出会う人形劇」と題し2004年から飯田文化会館の自主事業として、また毎年8月に開催されている「いいだ人形劇フェスタ」でも2005年から企画公演として同名の公演が開催されている。また、愛知県の職業人形劇団Mによると、2004年初演の3歳未満を対象とした公演は、2004年13ステージ、2005年17ステージ、2006年47ステージ、2007年67ステージと、年々増加しているとのことである。今後このような公演はますます需要を増し、それに伴い人形劇団の取組みも活発になるので

はないかと予想できる。

さて、これまで人形劇公演や、その他、演劇や音楽会等においては、基本的に3歳以上を観客対象として入場料を徴収していた。つまり、3歳未満の乳幼児は、人形劇鑑賞を含め、その他の芸術鑑賞は未だ難しいとみなされ、観客対象にはなっていないのである。幼稚園入園は3歳以上、また、保育所においても3歳未満は3歳未満児保育(乳児保育)とし、3歳以上の保育とは区別して考えられている。つまり、3歳はヒトの発達過程において一つの大きな節目と考えられているといえる。この発達の節目で区切られた3歳未満を対象にした人形劇は、人形劇関係者にとって新たな人形劇の世界への挑戦となっている。

この挑戦に職業人形劇団(以下、人形劇団・劇団)はどう取り組んでいるのか、また、今

後どう取り組んでいくことが望まれるのか。一部の人形劇関係者からは、試行錯誤の繰り返しなのなか課題山積であるとの声も聞く。一方研究者サイドにおいても、この公演の広がりや現状把握、そして3歳未満児にとっての人形劇の意味について等、研究は未だ手付かざるの状態である。

本論では、こうした3歳未満を観劇対象とした人形劇に関し、まず劇団の取組みや作品の把握をし、その特徴を考察する。そして、今後3歳未満を観劇対象とした人形劇作品およびその公演の意義について研究を進めていく際の観点を導き出したい。

## II. 目的と方法

1. 3歳未満を観劇対象とした人形劇の制作および公演に取り組む人形劇団とその作品を劇団のインターネットホームページを閲覧し抽出する。
2. 1で抽出した劇団を対象とし、質問紙調査を行い、作品について、また、3歳未満を観劇対象とする人形劇制作に対する考え等を把握する。
3. 2で把握した該当作品の公演を実際に鑑賞し、作品内容や観客の観劇の様子を観察する。

## III. 調査結果および考察

1. 3歳未満を対象とする人形劇に取り組む劇団および作品

### (1) ホームページより抽出できた人形劇団

2008年10月時点、インターネットで確認できた人形劇団のホームページは66劇団であった。そのうち、3歳未満を観劇対象とした作品を有していたのは10劇団、作品数は18作品であった。

なお、3歳未満を観劇対象とした作品とは、観劇対象の年齢を、0歳または1歳または2歳を下限として示した作品で、上限は3歳以上(就学前まで、小学生まで、あるいは大人

まで)としているものを含める。

### (2) 劇団への調査より把握できた作品

ホームページより抽出された10劇団に対し、質問紙調査を実施した。実施期間は、2008年11月から12月。調査依頼および回収は、郵送にて実施。該当作品を有する10劇団に対し調査用紙を依頼し、9劇団より回答を回収した。(回収率：90%)

調査項目は、①3歳未満を観劇対象とする人形劇作品について(・題名・観劇対象年齢の設定・上演時間・台詞・使用舞台および上演形態など・内容：ストーリーや構成など・演出の工夫・初演年月)②作品制作における3歳未満の発達特性の考慮③会場作りへの配慮④3歳未満を観劇対象とする人形劇公演の目的⑤子どもや親の観劇の様子や感想⑥今後の課題⑦その他自由記述。

調査の結果、把握できた3歳未満を対象とした人形劇作品は、新たに確認できたものを含め、回答のあった9劇団から22作品があがった。

表1に、調査より把握できた作品についてまとめた。

### 2. 3歳未満を観劇対象とした人形劇作品について

#### (1) 観劇対象年齢の設定

今まで観劇対象とされてこなかった3歳未満を対象とする人形劇公演に近年取り組み始めた人形劇団は、発達の節目と考えられる3歳という年齢の区切りをどう捉え、観劇対象年齢を設定しているのか。

「0・1・2歳児(とその親)」また「1・2歳児(とその親)」と、3歳未満を強く意識して観劇対象年齢を設定している劇団は、9劇団中3劇団6作品。ある劇団は、3歳未満と3歳以上の発達の特徴の違いに大きな意味をもって作品を制作し、0・1・2歳児とその親に限定した公演を徹底するため、3歳以上のきょうだいは入場不可とし、託児コーナーを設けて預かる対応を行っている。

表1 3歳未満を観劇対象とした人形劇作品

劇団 (五十音順)	作 品	観劇対象年齢	上演時間	台詞	使用舞台等	初演年月
えだまつこずえ 事務所	だってだっておばあさん	0歳~小学生	20分	有	けこみ舞台 (けこみ芝居)	1990年4月
	いろいろないろの3つのおはなし : Aタイプ	0歳~小学生	20分	有	テーブルの上に装置 (出遣い)	1990年4月
	わんくんと遊ぼう	0歳~小学生	10~20分	有	腹話術的な人形 (出遣い)	2000年4月
	いろいろないろの3つのおはなし : Bタイプ	0歳~小学生	25分	有	テーブルの上に装置 (出遣い)	2001年4月
	うちのかあちゃん(Bと併演)	0歳~小学生	12分	有	〃	2001年4月
ガイ氏即興 人形劇場	魔法の森の物語	2歳~小学低・家族	30分	有	けこみ舞台 (けこみ芝居)	1963年
	人形ファンタジー	2・3歳~家族	20~30分	無	〃	1963年
くわえ・ばべっと ステージ	かくれんぼしてるのだから	2~4歳	30分	有	けこみ舞台 (出遣い・けこみ芝居)	2002年4月
座・まりりん	クックとキッキの「魔法の箱」	0歳~小学低学年	25分	有	けこみ舞台 (けこみ芝居)	1993年4月
たいらじょう	シアタースタートプログラム 「0・1・2才のための人形劇」 「てるてるジョーくんとあそぼう!」	0~2歳(限定)と その保護者	40分+α	有	テーブル舞台 (出遣い)	2007年2月
人形劇団京芸 (ばるおじさん)	ぞうくんのさんぽ	0歳~大人	他2作品 と45分	有	テーブル舞台 (出遣い)	2000年8月
	うえだほんだのみち草げきじょう たまごの巻「たまごにいちゃん」	0歳~大人	他1作品 と45分	有	〃	2007年10月
	いたずらうさちゃん	2歳~大人	他2作品 と50分	有	〃	2005年12月
人形劇団クラルテ (赤ちゃん劇場 COU COU)	モンモとバンボはいつもいっしょ	0・1・2歳	10分	有	テーブル舞台 (出遣い)	2006年6月
	ポケのワンピース	1・2歳	15分	有	〃	2006年6月
	がたんごん	0・1・2歳	10分	有	〃	?
人形劇団ののはな	おおきくなあれ	1歳~就学前	13分	無	けこみ舞台	2001年6月
	レジ袋人形劇 ぞうの鼻はなぜ 長い	0歳~大人	7分	有	けこみ芝居 (出遣い)	2001年6月
	さんびきのこぶたとちいさなお うち	0歳~大人	15分	有	ペープサート	2001年6月
	ちいちいにんにん	0歳~大人	40分	有	テーブル舞台 (出遣い)	2007年2月
人形劇団むすび座	ミーくんとまほうのたね	0・1・2歳	30分	有	テーブル舞台 (出遣い)	2003年11月
	ミーくんのたのしいおつかい	0・1・2歳	30分	有	〃	2007年3月

残り6劇団では、3歳という区切りへの明確な意識は観劇対象年齢の設定においてみられない。1劇団1作品は「2歳から4歳」と設定し、3歳を区切りとは考えていないものの、乳幼児の発達が各年齢によって大きな違

いがあることを理解したうえで設定していることが伺える。

その他の5劇団は「0歳から就学前」「0歳から小学低学年」と設定し、6歳あるいは9歳(小学校低学年)の長い年齢区分を設定し

ていた。こうした作品もホームページでは、「乳児からご覧いただけます」「0歳から楽しめます」等の文言で作品紹介がされている。乳児から観ることが出来たととしても、各年齢層で満足のいく作品であることはおそらく期待できないと考える。3歳未満を主体とした作品制作がされれば児童は物足りないであろうし、児童主体とすれば乳幼児にはその内容やテーマの理解は難しいことになるだろう。3歳未満という未知なる観客への人形劇制作への挑戦においては、観劇対象の年齢を絞り、その発達の特徴を考慮した作品制作が望まれる。

しかし、3歳未満の子どもが年齢の上の子どもと観劇することを全面的に否定しているわけではない。年齢の上の子どもの観劇の姿から劇鑑賞の姿勢を学ぶことや、人形劇の楽しさを知ることは期待でき、その点での意味は認められる。

また、年齢層を幅広く設定せざるを得ない人形劇団の内情もあるといえる。劇団が、公演において採算を考慮するのは当然のことである。観劇対象の年齢層を幅広く設定することは、それだけ公演や観客の確保が期待できる。実際に、3歳未満を観劇対象とした公演では、観客数を多くせず、落ち着いた環境をつくるために観客数を限定する配慮をしている。しかし、その場合に入場料金を高く設定することは難しいのである。

劇団からは、今後の課題として、より細分化した年齢設定とそれにふさわしい作品の制作の必要性とあわせ、子育て支援事業に関する助成金の支給が求められている。

## (2) 上演時間

22作品のうち、各作品の上演時間は、10分未満から40分以上までと長短がある。しかし40分のはオムニバスで短編が連続される構成になっていたり、また、短い作品を2・3本組み合わせて1ステージ40～50分にまとめるなど、ほとんどの公演(1ステージ)が40分を目途にしているようである。

幼稚園や保育所、小学校などでの公演が、およそ60分であるのに比べ短い。これは、3歳未満の集中時間等を考えてのことである。公演(1ステージ)の時間も短い、1作品の時間も短く、それをつなげた構成にすることでステージに変化とリズムを持たせ、3歳未満の子ども達が最後まで集中して観劇できるように考えているようである。

## (3) 使用する舞台および上演形態

衝立状の「けこみ」と呼ばれる人形劇の舞台で区切られた間口から人形だけを出して演じる、いわゆる「けこみ芝居」は、4劇団4作品。その他の19作品は、人形を操る演者も、全身あるいは上半身を観客に見せるかたちで演技する、いわゆる「出遣い」の上演形態であった。

出遣いの18作品においては、ほとんどが机状の箱型の舞台、いわゆる「テーブル舞台」を使用するものが多かった。テーブル舞台以外には、観客席と舞台が同じ平面状に設置される平土間に、例えば草原を模した衝立状の大道具を置き、それをけこみのようにして人形を出して演技するもの、腹話術的な技法で人形を構えて観客の前に立ち舞台は使用しないものや、「パネルシアター」でボードの横に立って演じるものが3作品あった。

テーブル舞台は高さが100センチメートル以下のものが多く、演者はテーブル舞台の裏に隠れ人形だけを出して演技することもあるが、テーブルの後ろに立って上半身は観客に見えるかたちで人形を操ったり、また、人形を持ったまま舞台の前や横あるいは客席の中にまで移動して演じることもできる。つまり、出遣いは舞台から演者を解き放ち、演技空間を広げ、舞台と客席のボーダーレスを生じさせるといえる。

また、こうした出遣いの場合、人形を操る演者は、人形の操作者いわゆる「黒子」として存在するだけでなく、人形と対等な役者として舞台に存在することも可能になる。人形

が観客に語りかけるだけでなく、演者が役者として観客に直接語りかける演出や、演者と人形とのやり取りを観客に見せる演出も可能になるのである。

現在の人形劇界は、けこみを離れた出遣いの上演形態に偏重気味であり、テーブル舞台さえも使用しないいわゆる人間の俳優による演劇に近いかたちの作品も多い。けこみ芝居は、演技の際、腰をかがめた姿勢で演じるため演技姿勢の保持が困難である。そのために安易に出遣いに流れる傾向があると指摘する声も聞くが、けこみによって観客と舞台を明確に区切らないことでひろがる表現の可能性への挑戦も、一方では注目されている。

3歳未満といった初めて人形劇を観劇する子どもたちにとって、演者が見えていること、演者や人形の方から観客に積極的に近づいていくこと、演者が直接語りかける演出の多用はどのような効果を生むのか。この観点から、理論的な根拠をもって各劇団が積極的に出遣いの上演形態を選択したのか。今回の調査からは、劇団にそのような意図があったことは明確には把握できなかった。今後3歳未満を対象とする人形劇を考えていく際の、興味深い観点になるといえる。

#### (4) 台詞

人形劇は視覚的な表現の演劇、つまり、言葉以上に人形の動きや情景で表現する演劇といえる。言語能力の発達がまだ十分でない3歳未満を観劇対象とした人形劇作品において、言葉による表現と人形の動きあるいは音楽(音)による表現を、どのように効果的に組み合わせ制作しているか、関心が向けられる点であった。

回答の結果、台詞がなく音楽に合わせて人形が踊ったりパントマイム風に演技をする、いわゆるボードヴィルの作品は、22作品中2劇団2作品だけであった。その他の作品は、すべて台詞のある作品であった。

言葉の補助が無く動きのみから意味を理解

することは、想像力の発達をもって可能になるといえる。そして、音声言語は意味だけでなくその語調や声の調子により伝える内容(意味)を表現することが可能であり、2歳くらいまでは言葉そのものの持つ意味の理解よりも、語調などからの意味的理解が大きい。こうした点から考えると、ボードヴィルよりも台詞のある作品のほうがより多くの情報量を伴って表現され、幼い子どもにとって理解しやすいと考えられる。

実際にいくつかの公演を鑑賞した際に印象的だったのは、演者が、張り上げるような発声ではなくごく自然な日常の発声に近い声で語りかけ、台詞を言っていたことである。出遣いの上演形態により舞台と客席が一体化され、演者が観客に近づき距離が近くなったことも関係していると思われるが、微妙な語調に含まれる表現を大事にしているのではないかと考えられる。

#### (5) 題材

作品の多くが、子どもにとって身近に感じられる活動や出来事、事象を題材としている。

- ・“たかいたかい”や“かくれんぼ”，“散歩”など、子どもが好む遊びや活動を題材に取り入れている。「モンモとバンボはいつもいっしょ」「かくれんぼしてるのだあれ」「ミーくんとまほうのたね」など。
- ・親と子の日常のかかわりを題材として取り入れている。「おおきなあれ」「うちのかあちゃん」など。
- ・誕生日や、ケーキ作り、買い物など、子どもにとって生活の中でわくわくする行為を題材としてとりいれている。「ミーくんのたのしいおつかい」「いたずらうさちゃん」など。
- ・太陽、雲、雨などの気象に関する事象や、春夏秋冬の移り変わりなどの自然現象、また、青虫や草花など動植物の成長と変化の様子を題材に取り入れている。「てるてるジョウくんとあそぼう」「三つのいろのお

はなし」など。

また、登場するものも、ネコ・犬・魚・うさぎ・チョウチョウなど、実物や絵本、玩具を通して子どもが知っているもの、身近に感じているものが多い。

「赤ちゃん絵本」といわれ既に絵本の一ジャンルを確立した0・1・2歳向け絵本においても、この年齢の子どもの生活において身近な題材を選び、子どもが絵本を通して自分の体験を再現することを楽しむことがねらわれている。

佐々木宏子は、『絵本と想像性—三才まえの子どもにとって絵本とは—』のなかで、ソヴィエトの心理学者ヴェンケルらが行った実験を参考にし、「幼い子どもが好んでみる絵のほとんどが、現実の生活において経験に裏づけされた『再認』に近いものである」と述べている。<sup>1)</sup> 3歳未満の人形劇においても、子どもが日常生活において身近に感じている事物や事象を用いることで、再認による認知が行われ、より積極的に人形劇の世界を楽しむことが可能になると考えられる。

#### (6) 観客と演者との関係

前述(3)使用する舞台上演形態で触れたが、テーブル舞台を使用した出遣いの形態により、舞台と客席のボーダーレスが生じ、演者が人形を手に客席に積極的に入り込んでいく演出や、けこみを隔てずに直接観客に語り掛けややり取りを交わすことが可能になった。このことは、上演中における観客と演者との積極的な相互交流を可能にしている。本研究の対象作品においても多用されており、3歳未満を観劇対象とした人形劇作品の際立つ特徴といえる。

#### 〈観客参加型の演出〉

一般的なプロセシウム舞台による演劇やけこみ芝居といわれる人形劇の場合、舞台と客席は明確な一線を画し、観客は外側から虚構の世界である舞台の中の世界を鑑賞する。ところが、人形劇の出遣いでは、演者や人形が

客席に入り込み、直接的・積極的に観客を虚構の世界に引き込んでいる、ともいえる。

3歳未満の子どもの遊びの様子を見ると、虚構と現実の世界の区別があいまいである様子が見られるが、人形劇の観劇においても、けこみにより虚構と現実の世界を区切られて自身の存在する世界と人形が存在する世界が分けられるよりも、人形と同じ虚構の世界に身を置いて楽しむことに喜びを感じると考えられはしないか。ただしこの時、子どもは虚構の世界にいと意識しているとはいえず、現実・「ほんとう」の世界にいと認識している可能性は大きい。

本研究において鑑賞した作品には、具体的な劇中への参加の内容は次の3つのパターンがあった。

- ・芝居に出てきた魔法の実やケーキにのせるイチゴなどの小道具をもらい、演者と観客がそれを使って遊んだりケーキに飾りつける行為を通して、人形劇の世界に参加していく。「ミーくんとまほうのたね」「ミーくんのたのしいおさんぼ」など。
- ・人形を持った演者が観客席に入り込み、観客の子どもに話しかけたり触れ合ったりし人形との直接的なかわわりを楽しむ。「てるてるジョウくんとあそぼう!」「ミーくんとまほうのたね」「モンモとバンボはいつもいっしょ」など。
- ・人形や演者が観客に問いかけたりいっしょに歌を歌ったりなど、やり取りを楽しみ、そのやり取りによって人形劇が進行していく。「わんくんとあそぼう」「てるてるジョウくんとあそぼう!」など。

#### 〈家庭での遊びの提供〉

見立てたり想像の世界をひろげたりなど、人形劇に通じる要素を含めた親子の触れあい遊びや手遊び、身近なもので人形製作の紹介などを劇中に取り入れた作品構成。

家庭に帰ってから、公演で体験したことや教えてもらったことを生かして、親子での遊び

を広げて欲しいとの劇団の願いが根底にある。

- 作品の進行に合わせ、お日様がきらきら輝く様子を両手で表したり、強風に飛ばされないように子どもが親にぎゅっとしがみつくなど、演者の模倣を促しながら、みんなでやってみて楽しむ。「てるてるジョウくとあそぼう!」など。

- レジ袋という日用品を用いた人形作りからはじめ、その場で作った人形で劇を進める。「ぞうの鼻はなぜ長い」。最後にタオルで作る人形を紹介し、家庭での人形劇遊びを促す。「モンモとバンボはいつもいっしょ」など。

### 3. 3歳未満の発達特徴を考慮した作品制作

「3歳未満を観劇対象とした人形劇の制作・上演において、3歳未満の発達の特徴を考慮しているか」の問いに、「かなりしている」「まあまあしている」「あまりしていない」「していない」から一つ選択し回答を求めた。結果は、「かなりしている」：3劇団、「まあまあしている」：5劇団、「あまりしていない」：1劇団であった。

作品の制作にあたっては、心理学や乳児保育の専門家、また小児科の医師などに乳幼児の発達について学んだり、専門書を調べるなどして取り掛かったという劇団が多い。回答においても、1劇団以外は、程度の差はあるものの3歳未満という今まで観劇対象としなかった乳幼児に対し、「子ども」というひとくりではなく「3歳以上とは異なる特徴をもった子どもたち」として、意識していることがわかる。ただし、意識と、3歳以上と異なる発達の特徴に関する理解が比例しているか、その点は断言できない。

考慮している内容については、以下のようである(複数回答)。

〈視覚の発達への考慮〉：2劇団

- 五感の中で一番ゆっくり発達していく視覚を考慮しての人形作り(美術)や客席作り。
- 視力の発達が十分ではない段階なので、美術において明るい色合いを選ぶ。近くで観

てもらえるよう親子の場合30組を適正観客数とする。子どもの近くに行く演出をし、人形を近くで見ることが出来るようにする。

〈集中力と上演時間〉：2劇団

- 30分くらいとし、集中しやすくする。

〈言語的理解〉：3劇団

- 言語能力が発達途上なので、なるべく言語に頼らない芝居にし、ビジュアル的でわかりやすいものにする。
- 擬音語や繰り返しの短い単語を選んで台詞に取り入れる。
- ストーリーや台詞に頼らない動きや、美術的な表現を通して感じられるようにする。
- 乳児の持つ音声を聴き取る力、赤ちゃんが言葉を理解していることを感じながら、丁寧に語りかける。保護者が子どもに語りかけながら楽しむことを勧める。

〈感覚的な楽しみ〉：3劇団

- 人形や小道具に触れるなど、触覚の感覚も大切にしている。
- 会場の雰囲気も含め、肌感覚で楽しんでくれたらと思っている。
- 客席に入り込み、人形などで直接触れ合うことを取り入れている。

〈テンポ〉：2劇団

- 子どもにとっての快いテンポに心がける。
- 語りや歌のテンポ、間は、その日の子どもの状態に合わせる。

視覚は、6ヵ月で約0.2、1歳で0.4になり、3～5歳頃になって成人と同じ程度になる。<sup>2)</sup> また、言語能力に関しては、およそ1歳頃に初語が発生し、その後、およそ3歳ごろに会話成り立つようになる。こうした、外見的に明らかに把握できる発達に関しては理解しやすいが、そうではない認知や想像性の発達については、劇団の回答にはあがってこなかった。

3歳未満の人形劇としてどのようなものがよりふさわしいのか、およそ2歳までにみられる感覚運動知能からその後3歳以降の前操作的思考へという認知の発達。<sup>3)</sup> 生後10ヵ月

頃からみられる“ふり”が2歳頃には遊戯活動の中にさまざまな想像活動として表れ、3・4歳になると目覚しい発達をみせる想像能力の発達<sup>4)</sup>。こういった発達の側面からも、3歳未満にふさわしい作品について考えていく必要があると考える。

劇団からは、今後の公演活動の社会的広がりとして3歳未満を観劇対象とした作品としてふさわしい人形劇の質的向上を考え、子どもの発達に関する専門家のアドバイスや、3歳未満の人形劇に取り組む劇団同士の情報交換等、さまざまな関係団体とのつながりをもって作品制作や公演に取り組んでいきたいという課題があげられている。

#### 4. 会場作りへの配慮

9劇団全てにおいて、考慮していると回答があった。配慮している内容については以下の通りである。

〈室内の明るさ〉：9劇団

- ・会場内を暗くしないようにする。

〈観客数〉：1劇団

- ・観客数を限定する。あまり多くならないよう、20組までとする。

〈部屋と客席〉：5劇団

- ・あまり広すぎない部屋で、ステージと客席の距離が近いよう、一体感が持てるように。
- ・ゆとりがあるよう、子どもが途中で寝転がっても大丈夫な広さの確保。
- ・平土間に舞台を組み、客席と舞台が同一平面に。

〈座り方〉：4劇団

- ・小さい子どもから前に座り観やすいように。
- ・親子は無理やり離して座らせない。
- ・客席に段差をつけ、後ろの人も観やすくなる。

〈人形の出迎え〉：1劇団

- ・入り口で人形が出迎え、人形に慣れるようにする。

初めて人形劇を観るといふ子どもや、大勢の人が集まる場所に参加する経験の少ない子

どもが多い。まずは、子どもが恐怖心を抱かずに安心して観ることが出来るように、部屋を明るくしたまま上演することは最低条件のようである。

また少人数であること、あまり広すぎないことなどは、視力の発達への配慮とあわせ、前述した出遣いによる演者と観客・会場全体の一体感をつくることをねらっている。

#### 5. 公演の目的

劇団が3歳未満を観劇対象とした作品に取り組んだきっかけについて、公演鑑賞の際に劇団関係者に尋ねた。乳幼児サークルを新たに設置する動きが見られる子ども・おやこ劇場からの要請、また、長年人形劇をやっている中で「3歳未満の子どもたちを主体にした公演をしたい、この年齢の子どもたちでも十分観ることが出来るのでは」という個人的な思いからという回答が得られた。

作品の初演年月を見ると、2000年以降がほとんどである。2000年の新エンゼルプランには、在宅児を含めた子育て支援の推進として、地域子育て支援センターの整備5ヵ年計画が示されている。3歳未満を対象とした人形劇公演の要請も、こうした社会的背景が影響していると思われる。

3歳未満を観劇対象とした人形劇の公演は、親子で観劇する子育て支援の場が圧倒的に多い。保育所の3歳未満児保育の場で公演を行うことは、ある劇団によると年に1度か2度、また別の劇団では今までに1度あった程度ということである。

こうした状況の中、劇団は3歳未満を観劇対象とした人形劇の公演の目的をどう考えているのか。自由記述の回答から、目的の対象別に、「子どものため」「親のため」「親子のため」「人形劇のため」とカテゴリー化してまとめた(複数回答)。

〈子どものため〉：5劇団

- ・子どもが無理のない範囲で人形劇を楽しんでほしい。



- ・子ども同士の交流、他の子どもの存在を知ること。
- ・子どもの豊かな想像力を広げたい。
- ・子どもの成長エネルギーの発散と集中を促す。
- ・子どもが小さな時から生の舞台に触れ豊かな感性や感情を育てる場。
- ・子どもが観劇の感動を通して心の栄養を得て生きる糧にしてほしい。

〈親のため〉：3団

- ・親が心地よく楽しく観て息抜きの場とする。
- ・親に観劇の感動を通して心の栄養を与え生きる糧を提供する。
- ・親同士の交流の場として。

〈親子のため〉：5劇団

- ・親と子両者が楽しめること。
- ・親子でゆったりした時間を過ごす。
- ・親子の交流。
- ・親子が日常に活かせる遊びの提供の場。

〈人形劇普及のため〉：1劇団

- ・人形劇の存在を親(大人)に知ってもらうため。

親子で観劇することが前提となると、やはり、「親子のため」が最も多い。複数回答のため各劇団の目的は一つに限定されていないが、親の気分転換など「親のため」と考える劇団においては、作品制作においても、子どもが楽しむことと併せて親が楽しめる内容や演出に一層の工夫を凝らしていると考えられる。

この点について回答と作品分析を関連付けた考察は行っていないが、実際に公演を鑑賞するなかで感じ取れた各劇団・作品の作風の違いが、そういった制作意図から生じていることも可能性として考えられる。親も楽しくなくては一緒に観ている子どもも楽しむことはできないけれど、大人の反応を導き出すほうに傾かないよう、子どもに語りかけることを大事にしていると感じられる作品。親が積極的に子どもに関わって鑑賞することを誘導しているように感じられる語りかけやふれあ

い遊びをたくさん入れ込んだ作品など、各劇団によりそれぞれの特徴を感じた。

## 6. 0・1・2歳児の観劇の様子

### (1) 劇団の回答より

3歳未満を観劇対象とした人形劇の公演における子どもの様子については、どの劇団の公演においても、途中で集中が途切れて観ていられなくなったり泣いたりする子どもがいるようである。

子どもはその日の体調や気分によってその公演を落ち着いて観ることができるか否かが異なってくる。作品の質や出来栄以上に、子ども一人ひとりの状態や、今までの生活経験、発達の違いが観劇の状態に大きな影響を与えるのである。そのため劇団は、試行錯誤しながら毎回の公演に臨み、そのたびに子どもの姿や反応から新たな発見を得て次回の公演に生かすことを繰り返しているようである。

ある劇団の回答には「自分自身の乳児の公演の経験が浅いころは、何が何でも観てもらわなければという私の気持ちが強く出すぎていて、乳児たちのリズムに合わない公演をしていたように思います。泣いたり、ぐずったり、途中で出て行ったり、また反応があるかないかのようなこともある。しかし、そんなリズムに合わせてゆっくりと公演をつくっていくことに少し慣れてきた最近では、親たちが、公演が進むにつれやわらかい顔になり、子どもも落ち着いて観てくれるようになってきたと思います」とある。

3歳未満児の観劇は、3歳以上の子どもたちとは異なっていて当然であり、表現者としてそれを前提として受けとめた上でないと、3歳未満児に人形劇を観てもらおうこの公演活動に取り組むことは難しい。

しかし、そういった観劇のできない子どもよりも、30分あるいは40分の間、割と落ち着いて舞台に集中して観ている子どもが多く、まだだめかと思ったがずっと観ていてびっくりしたという親の感想も毎回数多く寄せられ

ているとのことであった。4ヵ月の乳児もぐずらずに30分の人形劇を観ていたとか、1歳の子どもが舞台をじっと観て体をゆすったり笑ったりしていた、話の内容はわからなくても人形の動きや演者の声のトーンでひきつけられていたなど、30～40分の公演を保護者とともに落ち着いて観劇できている。親子が一緒に観劇しない保育園の3歳未満児保育での公演においても、親子一緒に観劇以上に落ち着いて観ることが出来るという実態もあるとのことである。これは、集団保育での経験が大きく影響しているといえる。

## (2) 公演鑑賞時の観察から

本研究にあたり、調査の回答を得た人形劇団のうちから4劇団(たいらじょう・人形劇団京芸・人形劇団クラルテ・人形劇団むすび座)、および、現在3歳未満を対象とした人形劇作品の制作に取り組んでいる職業人形劇団Tの試演会を鑑賞し、作品鑑賞と併せ、観劇している子どもおよび大人の様子を観察した。

前節(1)劇団の回答よりにあった子どもの姿が実際に見られ、0歳児でも舞台に視線を向け人形劇を30分以上観ている姿もあれば、途中で部屋の中を歩き回ったりごろごろしたり、人形が登場したところで泣き出してしまふ子どもの姿も見られた。

### ① 0・1・2歳の違い

ある劇団の回答には、「0・1歳は食い入るように観ていることがおおい。2・3歳は反応して言葉を発したりする」とあったが、この点については、5劇団の鑑賞を通し筆者も感じたところである。

子どもの発達からみれば当然のことともいえるが、言葉がまだ出ない0歳あるいは一語文が出始めた満1歳、それ以降もまだまだ発語は活発ではなく2歳を過ぎるのを待たねばならない。0・1歳では、人形や人形の動きを無言のままじっと見つめる姿が特徴的であった。2歳半ばを過ぎた子どもは、演者の問い

かけに対して答えたり、人形が登場すると言葉で反応したり、また、声を出して笑うという反応も活発に見られた。2歳を過ぎると言葉の意味的理解も進み、話の筋も少しずつ追えるようになってくる。作品の観劇対象年齢の設定において、1劇団は「2歳から4歳」としていたが、これは、理論的に考えてのことだろうと思われた。

0・1・2歳と、今まで観劇対象となっていなかった3歳未満の子どもたちをひとまとまりで捉えているが、はたしてそれでいいのか。ある劇団があげた今後の課題には、年齢別にもう少し細かく分けて作品づくりが出来ないものかという意見もあった。本論では現在の人形劇界の流れをうけ3歳を発達の節目として考えてきたが、今後再考する必要があるかもしれないということを付け加えておきたい。

### ② 親と一緒に観劇

人形劇のようなその場限りのライブの芸術の場合、さまざまな条件によって毎回全く同じように演技が展開されるわけではなく、演者と観客との関係性の中で作品は完結する。そのため、その時々有形無形の諸条件により作品の出来や観客の鑑賞態度も違ってくる。この点を前提として、次にあげる2つの公演における子どもの様子の違いを考察したい。

今回鑑賞した5劇団の中で、人形劇団むすび座の「ミーくんともまほうのたね」を保育所の3歳未満児(0・1・2歳児クラスの子どもたち)50名と保育士、子育て支援センター(申込制で30組の親子)での公演を、2日にわたり鑑賞した。

保育所の上演において、0歳の子ども1人が途中で動き回ることがあったが、他は0・1・2歳児とも落ち着き舞台を集中して見つめる様子が見られた。2歳児では1人の女児が目立った反応を返していた。

一方、翌日の子育て支援センターの場では、基本的に親1人に子ども1人で、子どもは親の膝に抱かれて観劇するかたちであった。こ

ちらも途中で歩き回る子どもは2人ほど、ぐずったり泣き出す子どもはいなかった。

そのなかで一番大きく違いを感じた点は、子どもの笑い声が、親子一緒に観劇した子育て支援センターでの公演の方が大きかったことである。保育所の子どもたちもところどころで声を出して笑い決して反応が悪いわけではなかったものの、センターにおいては、保育所の子ども達が笑わなかったところで親とともに子どもも大きな声で笑いながら観劇していた。

また別の劇団の公演においては、親が笑った直後に子どもが膝の上で笑う様子が多々見られた。おそらく、子どもは意味を理解して笑うのではなく、親の笑い声や身体の振動から、感覚として笑いを共感し自身の笑うという行為になったと考えられる。

また、親と一緒に観劇の場合、親が耳元でささやいて人形劇を解説したり、指差して教えたり、膝に抱いた子どもをゆすったり触ったりして身体に快の刺激を与えることで、子どもは最後まで集中して観劇することが促されているといえる。

赤ちゃん絵本を親子で楽しむ場合は、親が絵本に表された内容を子どもに伝える、いわば表現者という役割を負う。では、人形劇ではどんな役割を担うのか。親は子どもと同じ観客であることで鑑賞のモデルとなり、そして時には、人形劇の理解を即応的に助ける解説者・援助者にもなる。こうしたふたつの役割を持つ大人との観劇は、年齢が低い幼児や観劇経験の少ない幼児にとって大きな意味があるといえる。

#### IV. おわりに

本研究において、3歳未満を観劇対象とする人形劇に取り組む劇団、そしてその作品についてその概要を把握することが出来た。劇団の取り組みは、2000年以降顕著に作品がつくられるようになってきているが、まだ、取

り組む劇団は全体的には少ない。しかし、公演回数は増加し、需要が高まっている。

そして、作品分析から導き出された3歳未満対象の人形劇の大きな特徴は、出遣いの上演形態をとり観客に話しかけたり触れ合ったりと、直接的なかかわりの中で展開される「観客参加型」ということである。舞台空間と観客席が一体化され、人形や演者が観客を誘い、観客も劇中の世界を一緒に遊び楽しむ、つまり、観客である子どもは人形劇の鑑賞の場で遊ぶのである。遊びと鑑賞の融合された場が、3歳未満を観劇対象とした人形劇の作品としてよりよい意味を持っているように考えられる。

3歳未満の子どもが人形劇の公演を観ることはどのような意味があるのか、どのような発達に資するのか。この点について、発達心理学の側面から探求し明確にしていく必要性和意味は大きい。しかし、その点に取り組む前に、3歳未満の子どもが人形劇を観るというその活動自体の性質について考えると、それは芸術鑑賞というよりも遊びとしての要素を大きく持っていると考えられる。

劇的活動において、「劇遊び」「ごっこ遊び」から「演劇」へと、劇的要素を増加させていくことを参考にすると、<sup>5)</sup> 鑑賞経験においても、遊びの要素を多分に含む観劇形態から、次第に劇的要素が強調された観劇形態に移行していくことが考えられはしないだろうか。

今後、年齢の低い子どもや人形劇の観劇経験のない子ども、つまり3歳未満の子どもが観劇する人形劇作品や、3歳未満の子どもが人形劇を鑑賞する意味について研究を展開していく際、「遊びと鑑賞の融合」を一つのキーワードとして取り組んでいきたいと考える。

#### 註

- 1) 佐々木宏子：絵本と想像性—3才まえの子どもにとって絵本とはなにか—、高文堂出版社、東京、1975、p.120.

- 2) 山田紀代美：乳幼児期の心身の発達，見る・考える・創り出す 乳児保育（CHS 子育て文化研究所編），萌文書林，東京，1999，p.41.
- 3) 小嶋秀雄，森下正康：児童心理学への招待 [改訂版]，サイエンス社，東京，2004，p.78.
- 4) 古賀愛人：幼児における知覚および記憶の発達，乳幼児発達心理学（大平勝馬編），建帛社，東京，1987，pp.96-97.
- 5) 松崎行代：円形舞台による劇遊びに関する一考察，飯田女子短期大学紀要，12，103-104，1994.

#### 謝 辞

本研究にあたり，調査および公演の鑑賞にご協力いただいた人形劇団の皆さま，公演主催者の皆さまに，心より感謝いたします。